

書 評

木村福成著 『国際経済学入門』

小 田 正 雄

1. はじめに

本書は国際経済学を研究、教育、学習する者にとって待望の書である。著者の木村福成氏は民間の研究機関に就職された後、アメリカのウイスコンシン大学マジソン校でPh.Dを取り、その後しばらくSUNY at Albanyで教鞭をとられた経験の持ち主である。現在、慶応義塾大学経済学部に所属して次々に専門のジャーナルに優れた論文を発表し、世界を股にかけて精力的に活躍されている気鋭の研究者である。またしばしば日本経済新聞の「経済教室」に颯爽と登場し、正論を堂々と主張する熱血漢でもある。その木村氏が、1996年4月から97年11月まで「経済セミナー」に連載された原稿に手を加えて一層読みやすくしてまとめられたのが、本書である。日本語で書かれているが、英語に翻訳すれば世界市場に輸出できる、輸出可能財である。国際経済学の分野にも国内財としてしか通用しない書物もあるが、本書は世界で通用する国際経済学のテキストないし研究書である。

国際経済学の分野では、わが国で出版されるテキストだけでもここ数年、毎年10冊をこえる。これに外国、特にアメリカで出版された優れたテキストやモノグラフも参入してくるので、この分野における我が国の市場は非常に競争的である。something newのない書物はすぐ市場から消えてゆく運命にある。このような中であって、多くの優れた研究業績と豊富な授業経験に基いて執筆

されたのが本書である。読む人を引きつけ、考えさせ、知的興味をかきたててくれる座右の書である。ひも解いてみれば分かるように、本書には多くの国際経済現象を理解するのに必要な分析手法と視点が満載されている。よく、書物は著者の写し鏡であると言われるが、まさにその通りで、本書は爽やかな木村氏そのものである。厳しい競争に耐え抜く書物であることは間違いない。

2. 本書がなぜ魅力的か

内容を紹介する前に、本書が国際経済学のテキストとしてなぜ魅力的であるかをまず説明しよう。その理由を4点にまとめれば、次のようになる。

a) 扱われているトピックスが実に新鮮で多様である。そして、通常国際金融論ないし国際マクロ経済学の守備範囲とされる、為替レートの決定、パススルー問題、内外価格差やサービス貿易などに関するトピックスも扱われている。

b) 学生が質問してきそうな問題を予想した説明、いわば「痒いところを搔いてくれる」説明がなされている。然も、国際経済学の定理や命題を、実に丁寧に、やさしく、そして妥協を許さないで説明している。

c) 各章の始めに「この章のポイント」という欄を設けて、各章のエッセンスを要約し、各章の目的と結論が明示されている。また各章の終わりには、「練習問題」や「研究課題」が、そのヒントと略答をつけて用意されている。

d) 図と式と直観的説明という3つの道具を実に

うまく使い、然も命題や結論の政策的意味を明確にしている。

これら4つの特徴が、本書を魅力的な作品にしている。

3. 本書の構成と貢献

1. 構成

本書は5部、17章から章から構成される。それは、第1部「国際貿易パターン決定の理論」、第2部「国際貿易の厚生効果と貿易政策」、第3部「国際貿易と経済成長」、第4部「経済活動の国際化と国際経済」、第5部「為替変動と国際貿易」である。

2. 内容の紹介と貢献

本書が果たしている追加的な貢献を中心に、本書の内容を紹介しよう。

「序章」では国際経済学の守備範囲を明確にし、それに本書がいかに対応しているかを述べている。

1章の「国際貿易モデルの構造」では、一般均衡的な貿易モデルがどのような構造になっているかを述べている。特に3節の「生産構造と各種国際貿易モデル」では、生産構造を生産フロンティアの形で示しており、親切で分かりやすい。

2章の「リカード・モデル」では、このモデルは非常に単純な構造をしているが、使い勝手のいいモデルであることを示している。特に5節で、図2-8を使って、途上国である自国にとって、Aタイプではなく輸出財の種類を増やせるBタイプの技術革新が望ましいということを指摘している点は興味深い。しかし途上国の技術革新は、多くの場合先進国からの技術移転によって行なわれるので、Bタイプの技術革新が実際にどの程度行なわれるかは、改めて検討してみる必要があると思われる。

3章ではヘクシャー＝オリーン・モデルを、多くのスペースを割いて説明している。特に感心したのは、9節で国際貿易の4つの定理の成立に必要な諸仮定がきちっと整理されている点である。

本書も特殊要素モデル重要性を指摘し、4章でこのモデルの特徴を明かにしている。5節で資本賦存量が変化した場合を取り上げているのは興味深い。長期的には資本はmobile factorになるとしても、短期的には資本はspecificである。従って、図4-6の下方の図は長期的には問題ないが、短期的にそのように描けるかどうか、疑問である。

5章の「国際間生産要素移動」では、Mundell(1957)の貿易と要素移動の代替性と、Helpman(1984)の多国籍企業モデルを取り上げているが、その説明のうまさに感心した。

収穫逡増と不完全競争理論が結びついて1980年代に発展した“新国際貿易理論”は、最近の国際経済学のホット・イシューの一つであり、産業内貿易の拡大の説明に効果をあげてきた。新貿易理論とは何かについては、必ずしも合意が成立していない。私などは、Ricardian model, Heckscher-Ohlin model, および Specific Factor model の3つの貿易モデルが仮定していた constant returns to scale と perfect competition のいずれか、または両方をはずした貿易モデルに基いた理論を、新貿易理論と考えている。従って非常に多くのケースが考えられるわけで、著者も6章と9章に分けて検討している。この中、6章ではマーシャル的規模の経済と製品差別化を想定したモデルの下での貿易を扱っている。以上1章から6章までが、第1部である。

7章の「完全競争下の貿易政策の厚生効果」では、貿易政策の効果の標準的説明がなされている。説明が実にこまやかで、説得的である。

市場における歪みの存在は、貿易政策を過度に使用させる理由になっている。8章の「歪みの理論」では、例えばコメ農家の保護はセカンド・ベストにすぎない関税(貿易)政策ではなく、first bestで、然もそのコストが明確な生産補助金などの国内政策で対応すべきだ主張している。またそのような「正論」をきちっと提案するのが、エコノミストの責任であるとしている。全く賛成であ

る。

9章の「規模の経済性・不完全競争と戦略的貿易政策」では、この分野の古典となった Brander - Spencer (1985) モデルと Eaton - Grossman (1986) モデルの紹介とその後の発展、および戦略的貿易政策の評価を行なっている。Brander と Spencer はその論文で、1970年代の日本政府 (MITI) の政策の成功をモデル化したと言っているが、MITI の政策が Brander-Spencer の論文を生み、そしてそれが国際経済学の発展に貢献したとすれば、その外部経済効果は計り知れないものがあるように思う。

10章の「貿易政策と政治経済学」は、木村氏の国際経済学研究における比較優位が最もはっきり表現されている章である。周知のように、関税水準などの決定をモデルの中で内生的に決めることを、経済学では「政治経済学的」アプローチという。まずその先行研究、例えば Findlay-Wellisz (1982), Hillman (1989) のなどの幾つかを紹介し、ついで Bhagwati (1982), Krueger (1974) などからスタートした、レント・シーキング活動を紹介する。輸入割当ではレント・シーキング活動が行なわれるので、一般的に関税よりもさらに welfare loss が生ずる。しかし Bhagwati (1982) は、初期に関税という歪みがある場合には、レント・シーキング活動が逆に厚生を高めることがあることを示している。レント・シーキング活動をテキストに取り入れたのは、恐らく本書が始めてではないかと思う。この5節は特に一読に値する。以上の7章から10章までが、第2部である。

11章は「経済成長が貿易に与える影響」を扱う。成長と貿易パターンの関係、窮乏化成長論、雁行形態論、輸入代替と輸出化など、成長が貿易に与える重要なトピックスを扱う。図11-11は輸入代替と輸出化を示した図であるが、それは同時に幼稚産業保護論の主張でもあり、従って幼稚産業保護論の説明にも使えるはずである。

12章は逆に「貿易が経済成長に与える影響」を

扱う。具体的には、ある輸出部門のブームがその国の経済成長の足かせになるという Dutch Disease, Krugman (1979) の product cycle モデル、幼稚産業保護論の実証研究、貿易自由化と経済成長の関係など、貿易が成長に与える諸側面を扱う。以上11章と12章が、第3部である。

13章から15章は企業活動の国際化に関連したトピックスを扱っており、第4部としてまとめられる。まず13章は「国際収支統計とサービス貿易」で、国際収支統計とサービス貿易の概念、統計、および政策論である。

14章の「海外直接投資と企業活動の国際化」では、直接投資論、Jones (2000), Deardorff (1998) らによって進められている Fragmentation 論、および直接投資企業のパフォーマンスに関する木村氏自身の実証研究を紹介している。

15章の「地域経済統合と新しい国際経済体制」では、地域統合の理論、地域統合の数と世界の経済厚生水準の関係を分析した Krugman (1991) のモデル、地域主義と WTO の関係などが扱われている。WTO に詳しい木村氏の力量がいかに発揮されている。

第5部の16-17章は、通常「国際マクロ」で扱われているトピックスである。しかし「マクロ経済学」の「ミクロ経済学」化が進んでいる現在、このようなトピックスが国際経済学のテキストに含まれていても、それほど違和感はない。まず、「為替レートと貿易」では為替レート決定についての3つのアプローチとそれらの関係を分かりやすく説明している。次いで、貿易が為替レートに与える影響、逆に為替レートが貿易と産業構造に与える影響を取り上げている。

最後の17章「為替変動のミクロ的帰結」では、為替レートが国内外の価格に与える影響を分析している。ここで内外価格差を3つに分類することによって、隠れた政府規制や貿易制限的慣行を見出している。これは、佐々波他 (1996) における木村氏の研究が基礎になっており、非常に興味深

い。いわゆるパススルー問題も扱われていて、実証研究者としての木村氏の力量がいかに発揮されている。

4. 本書の評価と注文

われわれは国際経済学のテキストとして、すでに幾つかの優れた書物をもっている。世界的に有名な3部作である Caves-Frankel-Jones (1999), Ethier W. (1995), Krugman-Obstfeld (2000) を始め、伊藤元重・大山道広 (1985), 石井安憲他 (1999), 竹森俊平 (1995), 若杉隆平 (1996) などが第1級のテキストとして高い評価を得ている。しかし木村氏の本書はそれらを凌ぐ内容と気品を備えている。特に、木村氏自身の貢献を含む最近の新しい実証研究の成果が取り入れられている点を高く評価したい。本書が研究者や学生を始め、多くの読者に受け入れられ、長く命脈を保つことは間違いない。

最後に注文として、次の2点だけ指摘しておきたい。

a) 貿易均衡に関する説明が少し手薄になっていると思う。マーシャル・ラーナー条件など、貿易均衡に関する重要なタームが登場していない。貿易均衡については、2章4節に若干の説明がなされているが、全体のバランスから言って手薄のように思う。またこの点で、伝統的なオファー・カーブだけでなく、その1財ヴァージョンである輸出入曲線を使った分析も盛んに行われているので、それについても言及して欲しかった。

b) 本書に限ったことではないが、国際経済学はゲーム論の成果をもっと取り入れる必要があると思う。特に、WTO の場や2国間において通商交渉が進んでおり、そのようなプロセスを理論的に詰める必要があるのであるが、この点でゲーム論の成果を国際経済学の体系の中に取り入れる必要がある。ゲーム論を貿易論に取り入れた研究としては、McMillan J. (1986) があるが、最近のゲーム論の隆盛さを考えれば、ゲーム論の成果をより

多く取り入れる必要があると思われる。

References

- Bhagwati J. (1982), "Directly Unproductive, Profit-Seeking (DUP) Activities", *Journal of Political Economy*, 90.
- Brander J. and B. Spencer (1985), "Export Subsidies and Market Share Rivalry", *Journal of International Economics*, 18.
- Caves R., J. Frankel and R. Jones (2000), *World Trade and Payments; an introduction*, 8th. ed. Addison Wesley.
- Deardorff A. (1998), "Fragmentation in Simple Trade Models", *Univ. Of Michigan Discussion Paper*, no.422.
- Eaton J. and G. Grossman (1986), "Optimal Trade and Industrial Policy under Oligopoly", *Quarterly Journal of Economics*, 101.
- Ethier W (1995), *Modern International Economics*, 3rd ed., Norton.
- Findlay R. and S. Wellisz (1982), "Endogenous Tariffs, the Political Economy of Trade Restrictions and Welfare" in Bhagwati ed. *Import Protection and Response*, Michigan.
- Helpman E. (1984), "A Simple Theory of International Trade with Multinational Corporations", *Journal of Political Economy*, 92.
- Hillman A. (1989), *The Political Economy of Protection*, New York.
- Jones R. (2000), *Globalization and the Theory of Input Trade* (Ohlin Lectures, 8), MIT.
- Krueger A. (1974), "The Political Economy of the Rent-Seeking Society", *American Economic Review*, 64.
- Krugman P. (1979), "A Model of Innovation, Technology Transfer, and the World Distribution of Income", *Journal of Political Economy*, 87.
- Krugman P. (1991), "Is Bilateralism Bad?", in Helpman and Razin ed. *International Trade and Trade Policy*, MIT.
- Krugman P. and M. Obstfeld (2000), *International Economics, theory and policy*, 5th ed., Addison Wesley.

McMillan J. (1986), *Game Theory in International Economics*, Harwood.

Mundell R. (1957), "International Trade and Factor Mobility", *American Economic Review*, 47.

伊藤元重・大山道広（1985）「國際貿易」岩波書店

石井安憲他（1999）「入門・國際經濟学」有斐閣

佐々波楊子他（1996）「内外価格差の經濟学」東洋經濟

竹森俊平（1995）「國際經濟学」東洋經濟

若杉隆平（1996）「國際經濟学」岩波書店

（日本評論社，2000年5月，A 5，xiii+364，3200円）